2022年春の年会

特別講演

特別講演
Special Lecture

神戸における海技者教育の歩み

The Transition of Maritime Education and Training: Upbringing Maritime Officers and Engineers in Kobe

*矢野 吉治
神戸大学　大学院海事科学研究科・海事博物館長

嘉永 6（1853）年 6 月、ペリー艦隊の浦賀来航を契機に幕府は欧米諸国との歴然たる格差に直面し、海運の近代化へと一大転換を図ります。慶応 3（1867）年 12 月に兵庫が開港し、翌、慶応 4（1868）年 9 月 8 日に元号が明治へと改まりました。維新以来、大型商船の需要が急激に高まる中、西洋型商船を操ることのできる日本人海技者は皆無に等しく、日本の沿岸航路は西欧諸国の商船により支配されていました。高級船員の大半を外国人が占め、日本人がその下働きをする時代であり、日本の近代化がめざましい躍進を遂げる中、自国民による近代的商船隊充実の気運が急激に高まってゆきました。明治 40（1907）年 9 月に神戸の築港が始まり、大正 3（1914）年には第一次世界大戦が勃発、このとき、連合国側の我が国は造船や海運部門で大躍進を遂げますが、急増する邦船船腹量に見合う商船士官の不足を危惧します。このような背景から神戸の地における海技者教育が幕を開けました。神戸大学の深江キャンパスは大正 6（1917）年 9 月に設立認可の私立川崎商船学校に端を発します。川崎造船所の創立者である川崎正藏は『四面環海の我国は海運の発展によって台頭する』と唱え、その遺志を継いだ嗣子の川崎芳太郎により兵庫県武庫郡本庄村深江の浜に川崎商船学校が誕生、翌、大正 7（1918）年 3 月に第 1 期生 50 人が入学しています。さらにその 2 年後の大正 9（1920）年 8 月には国家へ献納され、我が国 2 番目の官立商船学校として神戸高等商船学校へと昇格、同年 11 月に第 1 期生 59 人が入学し、修業年限 5 年半の海技者教育が本格化しました。爾来、資源に乏しい我が国の生命線を維持するために、大正 14（1925）年に東京商船学校から改称の東京高等商船学校と肩を並べ、東の「越中島」、西は「深江」の愛称で幾多の商船士官を輩出して国の発展に貢献してきました。時は流れ、戦中・戦後の混乱期を経て、昭和 27（1952）年 5 月に国立大学設置法の一部を改正する法律により神戸商船大学がこの伝統の地に誕生し、同年 7 月に第 1 期生 120 人が入学しています。当時、先進各国が国策として原子力船の開発に取り組む中、昭和 33（1958）年には原子力工学をはじめ原子力船に関する科目が開講され、高度の商船運航技術教育、特に原子力工学を中心とした原子力商船に関する最新の学理と技術を研究、教授するとともに新しい時代に対応した原子力商船の運航管理技術者並びに広く原子力産業に貢献できる技術者を育成することを目的として原子動力学科が昭和 47（1972）年 4 月に新設されて第 1 期生 40 人が入学しました。その背景には、①世界における船舶の技術革新と海運界の動向　②原子力船の開発の必要性と現状　③原子力商船の開発と運航技術者養成の必要性　④神戸商船大学における原子力教育の現状　が挙げられます。これに先立つ昭和 38（1963）年 8 月に日本原子力船開発事業団が設立され、昭和 43（1968）年 11 月には原子力船”むつ”の建造に着工、同 44 年 6 月に進水、翌 45 年 7 月に同船は事業団に引き渡され定係港である青森県むつ市の下北ふ頭へ回航、第二期工事において原子炉が搭載され、47 年 9 月には燃料の搭載を終えています。その後の神戸では、海技者教育とともに時代を先取りした新しい学科が組織され、開学から半世紀を経た平成 15（2003）年 10 月 1 日に神戸商船大学と神戸大学とが統合して神戸大学海事科学部が発足、平成 19（2007）年 4 月には大学院海事科学研究科が設置され、さらに令和 3（2021）年 4 月に学部名を海洋政策科学部へと発展的に改称して現在に至ります。深江の地における海技者教育の変遷を、学生にとってその象徴的存在ともいえる歴代の練習船やキャンパス関連の話題を交えて概説します。

*Yoshiji Yano
Kobe Univ.